

生神女就寝祭

Успение

Dormition of Theotokos

8月15日／8月28日

至聖なる我が女宰生神女永貞童女

マリヤの就寝祭 8月15日/28日

晩 課

首唱聖詠、大連禱、カフィズマ（悪人の謀）を歌う。小連禱に続いて

祭-1

▽祭日経 P774

「主よ、爾によぶ」に八句を立てて左の讃頌を歌ふ、第一調。

主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や
われに聞きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れに
いたりたまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え
主やわれに聞きたま え ねがわくはわがいのりは
香炉かろのかおりのごとく 汝がかんはせのまえにのほり
わが手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん主や
われにききたま え

(句) 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

嗚呼至榮なる奇蹟や、生命の泉は柩に置かれ、天に登る梯は墓と為れり。ゲフシマニヤ、生神女の聖なる堂よ、楽しみ。我等信者はガウリイルを唱導者として呼ばん、恩寵を蒙れる者、慶べよ、爾に因りて世界に大なる憐を賜ふ主は爾と偕にす。(本来は以下の句を挟みながら3回繰り返す)

(句) 願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

(句) 主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん為なり。

(句) 主を望み、我が靈主を望み、彼の言を待む。

生神女よ、爾の秘密は奇妙なる哉、女宰よ、爾は至上者の寶座と現れて、今日地より天に移れり。爾の光榮は莊嚴にして、神聖なる奇蹟を以て輝く。處女等よ、王の母と偕に高きに升れ。恩寵を蒙れる者、慶べよ、爾に因りて世界に大なる憐を賜ふ主は爾と偕にす。(本来は以下の句を挟みながら3回繰り返す)

(句) 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

(句) 願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其の悉くの不法より贖はん。

権柄と寶座、首領と主制、能力とヘルウィム、及び威嚴なるセラフィム等は爾の就寢を讚榮す。地に生るる者は爾の神聖なる光榮に妝はれて欣ぶ。諸王は差役首及び差役等と偕に俯伏して歌ふ、恩寵を蒙れる者、慶べよ、爾に因りて世界に大なる憐を賜ふ主は爾と偕にす。(本来は以下の句を挟みながら2回繰り返す)

(句) 萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

(句) 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。



光榮は父と子と聖神にきすいまもいつも世世に ア ミン

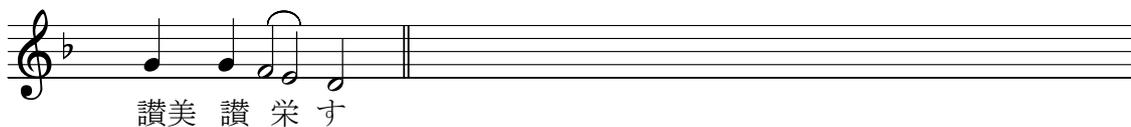
捧神 なる 使徒等は 神の指磨しき によりて 諸方より 高き雲に

挙げられて 生命いのちの源なるいと いさぎよき 爾の肉体に いたりて

愛を以てこれに 接吻 せり 至上の天軍は 主宰とともに 来たりて

畏おそれを抱きて かみを受けし いと潔き 肉体を おくり

かつ嚴かに 先導 して 見えずして上なる軍長に 呼べり



→通常部分 (P7/8「聖にして福たる」へ戻る)

(ポロキメンの後)

祭-2

パレミヤ (旧約聖書の読み) ▽祭日経 P776

創世記の読。(二十八章)。

イアコフは、ワイルサワイヤより出でて、ハッランに往けり。一處に至りて、日、既に入りたれば、彼處に宿れり。彼の地の石を取り、枕と為して、其處に寝ねたるに、彼、夢を見たり。視よ、梯、地に樹ちて、其上、天に至り、神の使等此に由りて陟降せり。主は、其上に立ちて曰えり、我は、爾の祖父アウラムの神、及びイサクの神なり。畏るる勿れ。爾が臥す所の地は、我、之を爾と爾の子孫とに與えん。爾の子孫は、地の砂の如くなりて、海、東、北、南に広まり、地上の萬族は、爾と爾の子孫とに因りて祝福せられん。視よ、我、爾と偕にし、爾、何處に往くとも、其途に爾を守り、又、爾を此の地に返さん。蓋、我は、凡そ爾に語りし事を行うに至るまで、爾を離れざらん。イアコフ、夢覺めて、曰えり、誠に、主は此の處に在すに、我、知らざりき。乃、懼れて曰えり、畏るべき哉、此の處。是れ他に非ず。乃、神の家なり。此れ天の門なり。

イエゼキイリの預言書の読。(四十三、四章)

主是くの如く言ふ、八日に至りて後、司祭等は爾等の燔祭と酬恩祭とを壇の上に献げん、而して我爾等を納れん、主神之を言ふ。彼我を引きて聖所の東に向へる外の門に返れるに、門閉されたり。主我に謂へり、此の門は閉されて開かれざらん、何人も此より入るを得ざらん、蓋主イズライリの神は此より入りたり、此れ永く閉されん。君は其君たるに因りて、此の内に坐して、主の前に餅を食はん、彼は門の廊の路より入り、又其路より出でん。彼又我を引きて北の門の路より堂の前に至れり、我觀しに、視よ、光榮は主の堂に満ちたり。

箴言の読。(九章)。

智慧は其の家を建て、其の七つの柱を堅め、其の畜を宰り、其の酒を調和し、其の席を設け、其の諸僕を遣わして邑の高き處より呼ばしめて云えり、無知なる者よ、此に来たれ。智慧の乏しき者に謂えり、来たりて、我が餅を食らい、我が調和せし酒を飲め、無知を棄てて生命を得、聡明の途を行け。侮慢者を戒むる人は己に羞を得、悪者を責むる者は己に疵を得ん。侮慢者を責むる毋れ、恐らくは彼爾を悪まん、智者を責めよ、彼爾を愛せん、智者に伝授せよ、彼益々智慧を獲ん、義者を教えよ、彼知識に進まん。主を畏るる眞畏は智慧の始めなり、聖者を知るは聡明なり。我に由りて爾の日は多くせられ、爾の生命の年は増さん。

→通常部分 P10 重連禱へ戻る

(増連禱が終わったら)

祭-3

リティヤのスティヒラ

▽祭日経 P778

「リティヤ」に讃頌、**第一調**。

言の実見者及び役者には、／其肉体に依る母の就寝、／之に於ける終の秘密を見ること宜しきに合へり、／ただ救世主の地より升るを見るのみならず、／彼を生みし者の移さるるをも證せん為なり。／故に彼等は神の力を以て／諸方より集められて、／シオンに至り、ヘルウィムより上なる者の天に往くを送れり。我等も彼等と偕に之に伏拝す、其我等の靈の為に祈ればなり。(楽譜は次頁)

(リテヤのステヒラ)

ことばの^{ジツ}実^{ケン}見者^{シヤ}および^{エキ}役者^{シヤ}にはその^{ニク}肉体^{タイ}による母の

ねむり かれにおける^{オワリ}終^ヒの秘密^{ミツ}を見ることよろしきに

かなえりただ救世主の地より^ホ昇ることのみならず

彼^カれを生みし者の^{ツツ}移さるることをも^{シヨウ}証せんためなり

故に^{ユエ}彼等^{チカラ}は神の力^{シヨ}をもって^{ホウ}諸方^{アツ}より集められてシオン

にいたり ヘルガイムより^{ツエ}上なるものの天にゆくをおく

れりわれらも彼等と共に彼れにふくはいす

その我等のたましいのために祈ればなり

第二調。(アナトリイの作)。

天に超え、ヘルワイムより栄え、萬物より尊き者、最優れたる潔淨に因りて永在の主を容るる器と為りし者は、今日至聖なる靈を其子の手に付す。彼と偕に萬有は喜に満てらる、彼は我等にも大なる憐を賜ふ。

(イオアンの作)。

至りて無てんなる聘女、父の愛子の母、預定せられて神の住所、其混淆せざる合一の處と為りし者は、今日至淨なる靈を造成主及び神に付す。無形の天軍は敬みて之を挙ぐ。生命の母たる者、近づき難き光の燈、信者の救、我が靈の^{きぼう}冀望は生命に移さる。

第三調。(ゲルマンの作)。

地の四極は来りて、神の母の尊き逝世を讃め歌はん、蓋彼は無てんなる霊を其子の手にとせり。故に世界は其聖なる就寝に活かされて、無形の者及び使徒等と偕に聖詠と歌證と属神^oの詩賦とを以て欣ばしく祝ふ。

光栄、第五調。(フェオファンの作)。

来れ、祭を愛する会よ、来りて、詠隊を合せん、来りて、神の匱の安息するに因りて、歌を以て教会を修飾せん。蓋今日天は懷を啓きて、萬有に容れ難き主を生子し者を受く、地は生命の源を與へて、祝福と榮華とに飾らる。諸天使は使徒等と偕に会を為して、畏を以て生命の首を生子し者が生命より生命に移さるるを瞻る。我等皆伏拝して彼に祈らん、女宰よ、爾の同族、熱心に爾の至聖なる就寝を祭る者を忘るる毋れ。

今も、同調。

人々よ、歌へ、我等の神の母に歌へよ、蓋今日彼は其至りて光れる霊を彼より種なく身を取りし主の至浄なる手に付す、且つ彼に息めずして世界に平安と大なる憐とを賜はんことを祈り給ふ。

→通常部分へ戻る。 P11 リティヤへ

(リティヤが終わったら)

祭-4

挿句のスティヒラ

第一調。▽祭日経 P780

挿句に讃頌、第四調。

人々よ、来りて、至聖至潔なる童貞女を歌はん、父の言は言ひ難く身を取りて彼より出でたり。故に我等よびて曰はん、爾は女の中に祝福せられたり、ハリストスを容れし腹は福なり。至浄なる者よ、彼の聖なる手に霊を付して、我等の霊の救はれんことを祈り給へ。

句、主よ、爾及び爾が能力の匱は爾が安息の所に立てよ。

人々よ、今日ダウィドの歌をハリストス神に歌はん、云ふ、王の女の伴たる童女は彼に従ひて王の前に進めらる、彼等は楽しみ祝ひて導かれんと。蓋ダウィドの裔よりする者、我等が神成せられし所以の者は己の子及び主宰の手に神妙にして言ひ難く託せらる。我等彼を神の母と歌頌して、呼びて曰はん、爾を生神女と承け認むる我等を凡その危難より救ひて、我が霊を諸の?害より脱れしめ給へ。

句、主は真実を以てダウィドに誓ひて、之に背かざらん。

至聖至潔なる童貞女よ、天使の群は天に人の族は地に爾の最尊き就寝を讃美す、爾は萬有の造成主ハリストス神の母と為りたればなり。求む、衆に歌はるる生神女、婚姻を識らざる者よ、爾を神と與に恃める我等の為に息めずして彼に祈り給へ。

光栄、今も、同調。

讃美たる生神童貞女よ、爾が言ひ難く爾より生れし主の許に出でたる時、神の兄、第一の聖首長イアコフ、尊貴なる首座ペトル、神学者の首領、及び衆使徒の神聖なる界は在りき。彼等は光明なる神言を以てハリストス神の撰理の神聖なる畏るべき奥密を讃頌して、生命の源たる神を受けし爾の肉体を葬りて欣べり。上には至聖至尊なる天軍は奇蹟に驚き、相傾きて曰へり、爾の門を挙げて、天地の造成主を生みし者を受けよ、我等の見ざる主を涵れし尊貴聖潔なる肉体を讃頌を以て歌はん。故に讃美たる者よ、

我等も爾の記憶を祝ひて、爾に呼ぶ、「ハリストティアニン」等の角を高くして、我等の靈を救ひ給へ。

→通常部分 P13「シメオン祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主経」

司祭 ^{けだし} 蓋国と権能と光荣は爾父と子と聖神^おに帰す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

(アミンに続いて)

祭-5

祭日のトロパリ 3回

▽祭日経 P780 (P774)

讃詞、**第一調。**

生神女よ、爾は産む時童貞を守れり、／寝る時世界を遺さざりき。／爾は生命の母として／生命に移れり、／爾の祈祷を以て／我等の靈を死より脱れしめ給ふ。(3次)

(トロパリ)

生神女や汝は産むとき童貞をまもりねむるとき世界を遺さ
ざりきん ぢは生命の母としていのちにうつりなんじの祈
禱をもって我等の靈を死よりまぬがれしめたまう

早課

六段の聖詠、大連禱に続いて
＜カフィズマ、セダレンは省略＞

祭-6

主は神なり、祭日トロパリ

▽祭日経 P780 (P774)

＜【主は神なり】日本では3回だが、本来は下記の句に続いて4回。第4句に続いてトロパリ。＞

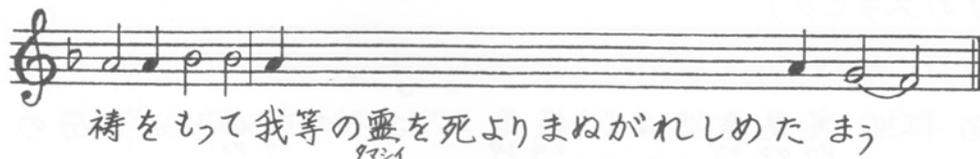
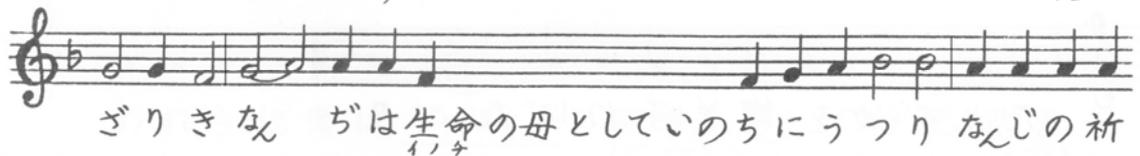
主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



＜カフィズマ省略＞

→通常部分へ戻る P17【ポリエレイ】へ

＜坐誦讃詞省略＞

ポリエレイに続いて讃歌

祭-7

【讃歌】（讃歌はロシア系のみので祭日経には出ていない。▽接続歌集 P342）

（ズナメニイのメロディによる）

ハリストス我が神の純潔なる母よ、我等爾を讃揚して、爾の至榮なる就寝を讃榮す。

次ぎて同詠隊又歌ふ。

右、全地よ、神に歓びて呼び、

左、其名の光榮を歌へ。

右、主王の前に祝へ。

ハリストス わがかみの 純潔なる ははよ
われら なんじを 讃揚して なんじの
至榮なる 就寝を 讃榮いす

光榮、今も、「アレルイヤ」、三次。

→通常部分 P18 へ戻る

【小連禱】【アンティフォン】 4 調

祭-8

提綱、第四調。▽祭日経 P782

我爾の名を萬世に誌さしめん。句、女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ。

われ 爾の 名を 万世に するさしめん

（詠） 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、（2回半）

輔祭 （句） 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、

（詠） 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、（2回半）

輔祭 凡そ呼吸ある者は

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(2回半)

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜うを主・神に禱らん、

(詠) 主憐めよ、3次

輔祭 睿智肅みて立て、聖福音經を聴くべし、

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾の神にも、

司祭 ルカ伝の聖福音經の読み、

(詠) 主や、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

輔祭 謹みて聴くべし

當日マリヤ起ちて、丞に山地に適き、イウダの邑に至り、ザハリヤの家に入りて、エリサワエタに安を問へり。エリサワエタ マリヤの安を問ふを聞きし時、胎児其腹の内に躍れり。エリサワエタ聖神に満てられ、大聲に呼びて曰へり、爾は女の中に祝福せられたり、爾の腹の果も祝福せられたり。

我が主の母我に臨めり、我何より此を得たるか。蓋爾が安を問ふ聲の我が耳に入りし時、胎児我が腹の内に喜び躍れり。信ぜし者は福なり、蓋主より彼に告げられし事は必成らん。マリヤ曰へり、我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり、蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂はん。蓋権能者は我に大なる事を成せり、其名は聖なり、其矜恤は世世彼を畏るゝ者に臨まん。彼は其臂の力を顕し、心の意の驕れる者を散らせり。権ある者を位より黜け、卑しき者を挙げ、飢うる者を善き物に飽かしめ、富める者を空しく返らめたり。其僕イズライリを納れて。我が先祖に告げしが如く、アウラムと其裔とを世世に恤まんことを記念せり。マリヤはエリサワエタと共に居りしこと三月にして、其家に歸れり。

(詠) 主や、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

50 聖詠 読む (交替で祝福を受けに行く)

続いて

祭-9 福音後のステイヒラ ▽祭日經 P783

汝のいさぎよき体カラダのうつしそなわれるとき使徒ら

は、床トコをめぐりておののぎて汝を見た りある者

遺体に目を注ぎて大きくおどろき ペトル は 涙を流して
 汝に呼べりあ 童貞女や我明らかに爾衆の生命たるもの
 未来の生命の楽の寓りし者の平臥せるを見て異に勝へず
 嗚呼至浄なるものよ 爾の子及びかみに 爾の群の害なく
 救われんことをせつにいのりたまえ

→通常部分 P20 へ戻る 【輔祭「神よ、爾の大いなる憐れみによって…」と「主憐れめよ」12回】
 (アミンに続けて)

祭-10 カノン ▽祭日経 P783

カノンは1から第9歌頌で構成され(第2歌頌は省かれる)、各歌頌の第一トロパリをイルモスと呼ぶ。二つめ以降トロパリは附唱を前につけて(変容祭では「主や光栄は爾の聖なる変容に帰す」など)唱える。最後のトロパリの前には「光栄は」「今も」をつける。第3歌頌のあとは小連禱(セダレン省略)、第6歌頌の後は小連禱とコンダク(イコス省略)、第8歌頌のあとの「ヘルビムより尊く」は大祭では歌わない。(中小祭では歌う。)第9歌頌のあとは小連禱。

就寝祭のカノンは二篇あるが、ここでは第一のカノンのみ行う。

第2のカノンは省略

冠詞(附唱)は「神智者は慶賀すべし」。

第一調。

第一歌頌

イルモス、童貞女よ、神妙の光栄に妝はれたる聖にして尊栄なる爾の記憶は、衆信者を聚めて之を楽しませ、始むるマリヤムに随ひて、舞と鼓とを以て爾の独生子に歌はしむ、彼巖に光栄を顕したればなり。

第1歌頌

童貞女よ、神妙の光栄に装われたる聖にして尊栄なる
 爾の記おくは衆信者を集めてこれをたのしませ
 始^{はじ}むるマリアムに随^{した}がいて舞^{まい}と鼓^{つづみ}とをもつて
 なんじの独生子に歌わしむ彼厳かに光栄を顕したればなり

(附唱) 神智者は慶賀すべし

生神女よ、無形の天軍はシオンに於て爾の神聖なる体を環り、使徒の会も俄に地の極より集まりて、爾の前に立てり。潔き童貞女よ、彼等と偕に我等も爾の尊き記憶を讃栄す。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

潔き者よ、爾は神を生みて、天然に勝つ尊敬を得たり。然れども己の造成諸及び子に倣ひて、天然に超えて天然の法に遵ふ。故に死して復起き給ふ、子と偕に永遠に在さん為なり。

第三歌頌

イルモス、萬有を造り萬有を守る神の智慧及び能力たるハリストスよ、教会を動揺なく推移なき者として堅め給へ、爾独聖にして、聖者の中に息ひ給へばなり。

第3歌頌

方^{ばん}有を^{つくり}削り万有を守るかみの智慧及び力たるハリストスよ
 教会を^{うごき}動揺なく^{うつり}推移なきものとして堅めたまえ
 なんじ^{ひとり}独り聖にして、聖者のうちに^{いこ}息いたまえばなり

(附唱) 神智者は慶賀すべし

純潔なる者よ、光明の使徒等は爾が死すべき婦にして、天然に超えて神の母なるを見て、戦ける手を以て光栄にて輝く者に触れ、神を容れし幕として爾を靚たり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

神の義判は狂妄者の悪を為す手を忽ち断りて、神聖なる光栄を以て、言が肉体と為りし所の生ける櫃の尊きを衛れり。

【小連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・^{しょうしんじょ}生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋爾は我等の神なり、我等光栄は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に、 (詠) 「アミン」

第四歌頌

イルモス、ハリストスよ、預言者の預言と預象とは爾が童貞女より身を取り給ふを示せり、爾の光の輝きは異邦民を照らす為に顕れん、淵も楽しみて爾によばん、人を愛する主よ、光栄は爾の力に帰す。

第4歌頌

ハリストスよ、預言と預象とは 爾が童貞女より
身を取り給うをしめせり なんじの光のかがやきは
異邦民を照らすために 顕れん 淵も楽しみて
なんじに呼ばん 人を愛する主よ 光栄はなんじに 帰す

(附唱) 神智者は慶賀すべし

謬民よ、見て驚くべし、光栄なる神の聖山は天の居處よりも高く挙げられ、地上の天は天上の不朽なる地に移さる。

(附唱) 神智者は慶賀すべし

潔き者よ、爾の死は永久なる最善き生命に移ることと為れり、此は爾至浄の者を暫時の生命より誠に神聖なる終なき生命に移せり、爾が欣びて爾の子及び主を仰き瞻ん為なり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

天の門は挙げられ、諸天使は歌ひ、ハリストスは其母の貞潔の寶蔵を受け給へり。ヘルウィム等は楽しみて爾に伏拝し、セラフィム等は喜びて爾を讃榮す。

第五歌頌

イルモス、ハリストスよ、我爾が萬徳の神聖なる言ひ難き華美を讃榮す、蓋爾、同永自在の光として、永久の光栄より輝きし者は、童貞女の腹より身を取りて、幽暗と蔭とに居る者に日の如く輝き給へり。

第五歌頌

ハリストスよ、我爾が^{ばんとく}万徳の神聖なる言ひ難き華美を
讃揚す 蓋しなんじ同永自在の^{ひかり}光として
永久の光栄より輝きしものは童貞女の腹より身を取りて
^{くらやみ}幽暗と^{かげ}蔭とに居るものに 日のごとく輝きたまえり

(附唱) 神智者は慶賀すべし

童貞女よ、使徒の会は雲に乗せられし如く、地の涯よりシオンに聚まりて、爾軽き雲たる者に法事せり。蓋此の雲より至上の神は義の日として幽暗と蔭とに居る者に輝き給へり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

神学者の神に悦ばるる口は聖神^oに感ぜられて、喇叭よりも高く生神女に逝世の歌を奉りてよべり、衆人の為に生命と救とを施す神が人体を取り給ひし潔き泉よ、慶べ。

第六歌頌

イルモス、深處に居る海の鯨の内の火は預言者イオナを包みて、爾が三日の葬の預象を為せり、蓋預言者は未だ吞まれざる時の如く、傷はれぬ者としてよべり、主よ、我讃美の声を以て爾に祭を献げん。

第6歌頌

ふか
深みに居る 海の鯨の 内の 火は 預言者イオナを
つつみて なんじが 三日の葬りの 預象をなせり
蓋し 預言者は 未だ吞まれざる 時のごとく
傷なわれぬ者として よべり 主よ、我 讚美の こえを以て
なんじにまつりを ささげん

(附唱) 神智者は慶賀すべし

萬有の王及び神は爾に於て天然に超ゆることを顕す。蓋彼は生るる時に爾を童貞女として守りし如く、?に於ても爾の肉体を朽ちざる者として守り、神妙の遷移を以て爾を榮して、子の母に適ふが如く、尊敬を爾に帰せり。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

童貞女よ、爾の産は爾を無形の火の実に明なる燈臺、神聖なる炭を盛りたる金の香爐、壺と杖、神の録しし石版、聖なる櫃、生命の言の案として至聖所に入れ給へり。

【小連禱】

- 輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
- 輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}靈の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
- 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・^{しょうしんじょ}生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に
- 司祭 (高声) 蓋爾は平安の王及び我が靈の救主なり、我等光榮は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

小讚詞、第二調。

祈禱に眠らざる生神女、轉達に変らざる倚望なる者を、柩と死とは留めざりき、蓋水貞童女の胎に入りし者は彼を生命の母として生命に移し給へり。

同讃詞

我がハリストスよ、私の恩意を衛り給へ、我毅然として世界の城垣たる爾の潔き母を歌へばなり。私の言を高くし、私の心意を深くせよ、蓋爾は信を以て爾に呼びて求むる者の冀願を行ふ。爾我に辯才の舌と耻を得ざる意念とを與へ給へ、永貞童女の胎に入りし光を施す主よ、凡の光照は爾より賜はるに因る。

第七歌頌

イルモス、神聖なる愛は耻なき激怒と火とに逆ひて、火に露を注ぎ、激怒を嘲けり、楽器に反きて、聖神[°]に感ぜらるる靈智なる義人の三音の琴を以て焰の中によべり、先祖及び我等の讚栄せらるる神よ、爾は崇め讃めらる。

弟 / 歌頌

神聖なる 愛は 恥なき激怒と火とに 逆ひて
 火に露をそそぎ、激怒をあざけり、楽器に そむきて
 聖神に 感ぜらるる 靈智なる 義人の三音の 琴を以て
 ほのおのうちに よべり、先祖 及び 我等の 讚栄 せらるる
 かみよ、 爾は 崇め 讃めらるる

(附唱) 神智者は慶賀すべし

モイセイは怒の中に神の作り、聖神[°]の書しし石版を砕けり、其の主宰は己の母を損ひなく守りて、今之を天の居處に入れ給へり。我等彼と偕に祝ひて、ハリストスによばん、先祖及び我等の讚栄せらるる神よ、爾は崇め讃めらる。

(附唱) 神智者は慶賀すべし

我等は潔き童貞女の逝世の最著しき吉日に於て、浄き口を以て鏡[°]の如く、心を以て和声の笛の如く、高き思念を以て大声の喇叭の如く、善徳を以て手を拍つが如くしてよばん、先祖及び我等の讚栄せらるる神よ、爾は崇め讃めらる。

光栄は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン。

神智なる人々よ、生まれ、蓋神の光栄の居處はシオンより天の宮に移さる。彼處に祝ふ者の浄き声、言ひ難き喜の聲は歓樂の中に於てハリストスによぶ、先祖及び我等の讚栄せらるる神よ、爾は崇め讃めらる。

第八歌頌

イルモス、神の全力の使は、焔を以て義者に露を注ぎ、不義者を焦す者として少者の前に顕し、生神女を以て、生命を流す泉、死の為には壊滅、我等の為には生命を注ぐ者と為せり、故に我等救はれし者は歌ふ、唯一の造物主を歌ひて萬世に讃め揚ぐ。

第8歌頌



神の全力の つかいは 炎を以て 義者に 露をそそぎ
不義者を 焦がす者 として 少者の前に 顕わし
生神女を以て 生命を流すいづみ 死の為には 滅び
我等の為には 生命を注ぐ者となせり
ゆえに われら 救われし 者はうたう
唯一の造物主を歌いて 万世に 讃め 揚ぐ

(附唱) 神智者は慶賀すべし

神学者の大衆は挙りてシオンに於て神妙なる聖櫃に随ひ、よびて曰へり、生活の神の幕よ、今何くにか往く、我等を絶えず顧み給へ、蓋我等救はれし者は信を以て歌ふ、唯一の造物主を歌ひて萬世に讃め揚ぐ。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

純潔なる者は世を離るる時、嘗て人体を取りし神を抱きたる手を挙ぐるが如く、母たるに因りて毅然として其生みし者に言へり、爾が我に賜ひし人々を世々に護り給へ、蓋彼等は爾に向ひてよぶ、我等救はれし者は唯一の造物主を歌ひて萬世に讃め揚ぐ。

「ヘルウィムより尊く」を歌はず

第九歌頌

(附唱) 我等萬族は爾唯一の生神女を讃め揚ぐ。或は諸天使は至浮なる者の就寝を見て驚けり、如何に

して童貞女は地より天に升る。

(イルモス) 潔き童貞女よ、天然の法は爾に於て勝たれたり、童貞し産む時に守られ、生命は死に配偶せらる、生神女よ、爾産む後には童貞女、死する後には生ける者として、常に爾の嗣業を救ひ給ふ。

附唱

われ 我等万族 爾 唯一の 生神女を 讃め 揚ぐ

第9歌頌

いさぎよ 潔き 童貞女よ、 天然の法は 爾に於いて勝たれたり

童貞は 産む時に まもられ 生命は死に 配偶せらる

生神女よ なんじ 産む後には 童貞女

死する後には 生ける者として 常に爾の嗣業を

すくいたまう

(附唱) 我等萬族は爾唯一の生神女を讃め揚ぐ。或は諸天使は至浮なる者の就寝を見て驚けり、如何にして童貞女は地より天に升る。

天使の軍は、已の主宰がシオンに於て其手に婦の霊を承くるを見て驚けり、蓋彼は手に合ふが如く、潔く彼を生みし者に言へり、最尊は者よ、来りて、子及び神と偕に光栄を受けよ。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

使徒の会は神を涵れし爾の体を送りて、敬畏を以て之を觀、傷感の声を以てよべり、生神女よ、爾は天の宮に子の許に登りて、常に爾の嗣業を救ひ給ふ。

【小連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が 靈^{たましい}の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記

憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋天の衆軍爾を讃揚す、我等も光栄は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世に、
(詠) 「アミン」

※日曜日の場合には「主は神なり」を歌う。

光耀歌

地の極より此に集まりたる使徒等よ、私の体をゲフシマニヤの村に葬れ、爾我が子及びカよ、私の神[°]を接給へ。三次。

祭 11 【讃揚歌とスティヒラ】 ▽祭日経 P795

4調で「凡そ呼吸ある者」を歌う。(本来 148,149,150 聖詠誦読し、末尾にスティヒラを挿入するが、通常省略され) 生神女讃詞を歌う。

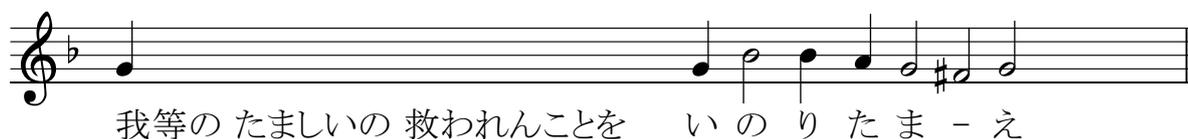
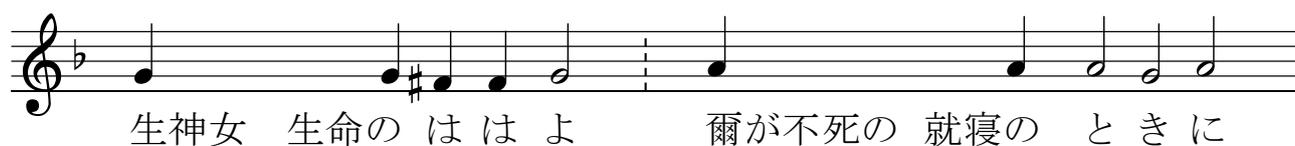


およそいきあるものは主をほめあげよ 天より主を
ほめあげよ いとたかきにかれをほめあげよ
ほめ歌は汝かみに帰す そのことごとくの神使や
かれをほめあげよ そのことごとくの軍やかれをほめ
あげよ ほめ歌はなんじかみに帰す

<スティヒラ省略>

光栄、今も、第六調。

生神女生命の母よ、爾が不死の就寝の時に雲は使徒等を空中に挙げたるに、世界に散じ居たる者は齊しく爾の至聖なる体の前に集まり、恭しく之を葬りて、ガウリイルの言を爾に歌ひて呼べり、恩寵を蒙れる童貞女、聘女ならぬ母よ、慶べ主は爾と偕にすと。彼等と偕に爾の子我等の神に我が霊の救はれんことを祈り給へ。



→通常部分 P22 に戻る 【大詠頌】を歌う

大頌栄、「聖なる神」を歌った後

祭 12

【祭日トロパリ】

(トロパリ)

生神女や汝は産むとき童貞をまもりねむるとき世界を遺さ
ざりきなん ぢは生命の母としていのちにうつりなんじの祈
禱をもって我等の靈を死よりまぬがれしめたまう

→通常部分 P27 に戻る

【重連禱、増連禱】 早課の終わり。発放詞。

一時課

<一時課の変更箇所は、トロパリコンダクのみ>

トロパリ 1 調

生神女よ、爾は産む時童貞を守れり、寝る時世界を遺さざりき。爾は生命の母として生命に移れり、爾の祈禱を以て我等の靈を死より脱れしめ給ふ。

コンダク 2 調

祈禱に眠らざる生神女、轉達に変らざる倚望なる者を、柩と死とは留めざりき、蓋水貞童女の胎に入りし者は彼を生命の母として生命に移し給へり。